

二宮飛鳥というボクの話、果たしてボクはどこまで語れるだろうか——なんて、どこかの猫か、或いは虎のように言ってみせたとこで、語るべき物語というものを生憎とボクは持ち合わせていない。

しかし、それは何も珍しいことではないだろう。

こういう時に語るべき物語を持っているというのは、余程の成功者かその逆か。どちらにせよ波瀾万丈な人生を送った者というのが定番であり、つまりは物語の行き着く先が常人とかけ離れた場所であるほどに、ギャップが大きければ大きいほどに、カタルシスもまた大きくなるという訳だ。

それこそどこかの猫か、或いは虎のように、だ。

もつと理解りやすく例えるならば、世界の頂点に立ったスポーツ選手。一代で巨額の富を築いたビジネスマン。天賦の才で成し得た者でも、人並みならぬ努力の末に辿り着いた者でも、きつとそこには他者を魅了する物語があるだろう。

陳腐な言い方をするのであれば、それは「特別」と称されるような人であり、人生であり、だからきつと、ボクに語るべき物語なんてものは存在しない。

今までも。

これから。

ヒトは誰しも一度は自分という存在を特別視する。それが良い意味であれ、悪い意味であれ。

ボクのような——はつきりと言ってしまえば、中二病と揶揄されるような人種であれば言わずもがな、だ。

ただまあ、セカイというのは存外に融通が利かないもので、魔法がなければ街を襲うモンスターがいる訳でもなく、そういった現実を知るほどに、本当は自分が特別でもなんでもないと、いう事を理解していくのだ。

その事に悲観していかないかと言えば嘘になるが、少なからず納得している部分もある。

ボクは自分の目で見たモノしか信じない。故に神と呼ばれる存在も信じていない。

神様がいないから——などと言うつもりはない。たとえ創造主と謂われるような存在がいたところで、人間だけで数億、全ての動植物を合わせれば途方もない数になるだろう命。その全てが祈りを捧げたとしたら、とてもではないが聞き入れる事は無理だろう。唯一神ならば当然。八百万だろうと難しいに違いない。

つまるところ、このセカイにおいて特別な事というのはおおよそ絵空事であり、つまりは空想、妄想の類であり、だからこそ成し得られなかったそれらを、諦めきれなかったそれらをヒトは夢に見るのだろう。

逆に言えば、そういった空想、妄想の産物を現実へと引き出せる者こそが“特別”たり得る訳だ。スポーツで言えば誰も見たことがないようなプレーを。学者で言えば誰も考えようとしなかつた発想を。

ただ、ボクにはそれが出来なかった。
それだけの話だ。

それだけの話ではあるけれど、だからといって素直にありのままを受け入れられるほど、ボクは達観もしなければセカイに対して迎合するつもりもない。

セカイが現実という重力でこの身を縛るのであれば、ボクはそれに抗う道を選択する。
夢に、空に、想いを馳せて創り上げた偽物の翼を広げて。

だが、そのささやかな抵抗に果たして意味があるのかと言えば、答えは限りなくノーだろう。一分の狂いもなく時を刻み続けるセカイはなるほど堅牢で、一個人では覆すどころか付け入る隙も見あたらない。もしもそんな事が出来るのなら、こんなに長々と己を卑下することもなく、ボクはボクの物語を浪々と語っていただろう。

結局は、そういう事なのだ。

どれだけ壮大な前置きをしてみせたところで。

どれだけ持つて回った言い方をしてみせたところで。

ボクという個人に出来る事など限られていて。

ボクという個人では物語たり得ない。

だからボクは、彼女の事を語ろうと思う。

二宮飛鳥という個人の話に期待する、などという奇特な人間がどれだけいたかは理解らない

が、なんにせよ彼女——神崎蘭子は今のボクを語る上で切っても切れない存在なのだ。
ならばいっせ、潔く、清々しく、堂々と。

これもまた、セカイへの些細な抵抗という訳だ。

神崎蘭子。

中学二年生で四月生まれで、十四歳で、A型で、純粹で、真っ直ぐで、輝きに満ちた——ボクとは正反対の、アイドル。

猫でもなければ虎でもなく、ましてや不死身であるはずもなく。

至って普通の、けれど「特別」な女の子。

これはそんな彼女の話だ。彼女と、彼女に憧れた、ただの偽物の物語だ。

まず始めに断つておくと、ボクは何も最初からこんな痛い言動をしていた訳ではない。

いつからこうなったのかと言えば、覚えていないというのが正直なところだけれど、この年代の少年少女ならば誰しもが少なからず通る道であり、ボクもまたそのご多分に漏れなかったという訳だ。それは至つて自然な流れであり、結果であり、つまりどういう事かと言えば、

『ボクは悪くない』

——なんてカッコつけて言うのと、あたかもかの作品に影響されたと思われてしまうかもしれないが、やはり原点などというものは曖昧で、だからこそボクと似たようなヒトたちは「気がついたらそうなっていた」と言うのだろう。

そういえば、あの作品もスキルだスタイルだと中々斬新な異能バトルを繰り広げていたけれど、最終的にはそれらの特殊能力も子供の特権のようなもので、大人になれば全て消えてしまふという夢も希望もない話だったか。

しかしそんな漫画に現実を知らされるまでもなく、子供は子供なりに自分たちがどういうセカイに生きているかを理解していて、そしてその中で枠から外れた者をどう扱うかということ、或いは大人以上に知っている。

無視するか、排除するか。

幸いな事にボクの周りにはそれほど陰湿な人間も、過ぎた正義を振りかざすような過激な人間もいなかったようで、今でも変わらず平和な学校生活を送れている。

元々「クラスの全員が友達！」などというようなキャラでもなかったのだから、変わらず、という言葉は本当にその字のまま。精々先生方から髪の色を戻せと言われるようになった程度のものであった。

と、彼女の事を語ろうと言った先から自分語りをしてしまった。

舌の根の乾かぬうちに——この場合は舌というよりはインクだろうか。

とはいえ、物事には順序というものがある。彼女の事を語ると言って、本当に蘭子に関するエピソードだけを羅列したとしても、そんなもので喜ぶのは……何人か思い浮かんでしまった。まあそれはまたいつか、機会があればその時に語るとして。

もつと単純な話。ボクが彼女を語るについて、どこから話すのがベストなのかという事だ。どこから。どこまで。

全てを語るつもりはない。そんな事をしようものなら、一体どれだけの紙面を埋めればいいのか皆目見当が付かないし、その分だけボクはボクについても語らなければいけない。

こんなキャラをしておいてなんではあるけれど、ボクは別に進んで黒歴史を積み上げる気はないんだ。

本当に、なんではあるけれど、だ。